

|   |  |                                      |
|---|--|--------------------------------------|
|  | <h1 style="color: blue;">お金と幸福</h1> <h2 style="color: blue;">SCE・Net 竹内 亮</h2> | <p>E-84</p> <p>発行日<br/>2015/12/5</p> |
|---|--|--------------------------------------|

### 幸福の条件

「人の幸福とは何であろうか」今の世の中では、あたかもお金持ちになることが幸福の条件のように感じることが少なくない。勿論、お金が足りなく日々の生活に窮する様では幸福とは言い難いだろう。しかし、お金さえあれば幸福だと言えるのだろうか。昨今、人々の様子を見てみると多くの人がひたすらにお金を追及している様に見える。企業では様々なことをお金に換算して組織の利益になるかどうか判断の基準となることが多い。ゴーイングコンサーンとして企業が存続する為には当然でもあると言えるだろう。多くの会社にとり安全や CSR、環境問題などに取り組んで、良い企業であることをアピールすることも、最終的には社会に受け入れられて利益を出し続けるための基礎作りだということかもしれない。安全でない会社が作った製品は安全とは思えない。「社員の安全に責任を持たない会社の製品が消費者の安全を十分に配慮しているとは思えない」などと、思われては企業として満足のいく活動が出来ないことは明白である。しかし、この観点のみから安全を見ると、最終的には「安全のコストはいくらなのか」ということが判断の基準になってしまう。それで良いのだろうか、というのが私の疑問である。

私は「安全は幸福の必要条件」と考えている。マズローの欲求五段階説では、「安全に対する欲求」は「生理的欲求」の次にくる基本的な欲求で、これが満たされなければ次に続く「社会に受け入れられたいと言う欲求」、「自分を認められたいと言う欲求」や「自己実現の欲求」には至らないとされている。生理的欲求と安全の欲求はある意味、生存に対する欲求である。生理的欲求は生命体を維持するための欲求で、それは健康でありたい、老化を遅らせたい、などの形で現れ、その欲求にこたえるべく多くのビジネスに繋がっている。それでは安全はどうであろうか。私は人の身に危害が加わらない様にあらゆる手立てを用いるのが安全だと考える。ホームセキュリティーなど防犯ビジネスも存在するが、法治国家では法律が安全を守るための重要な役割を果たしている。当然、私たちが法律を守らなければ、安全は覚束ない。しかし、法律があっても必ずしも安全とは言えない。殺人犯の刑をいくら重くしても殺されてしまったら終わりである。また、身の危険はあらゆるところに存在する。道を歩いていても、いつ自動車が飛び込んでくるか分からない。この様に安全はたやすく保証されるものではない。

では、私たちは幸福の必要条件である安全を手に入れることは出来ないのだろうか。それは容易ではないが、安全に向けての努力を日々続けることが、唯一の方法ではないだろうか。企業が従業員の安全を願うのは、会社の評判が悪くなるとは困るからではなく、か

けがえのない働く仲間を失いたくないという気持ちに基づくものでなければならない。その思想は従業員の安全がその人の幸福の必要条件だという理解と従業員の安全を何としても守るという行動を求めるものである。従業員を使い捨てにしようとするブラック企業にはその発想は持てないだろう。

### 工場の安全

殆ど全ての製造業には工場があり、そこには製造作業に従事する人たちが働いている。多くの場合、工場には一般家庭よりも危険な物質や設備があり、家庭生活上で過ごす場合と比較するとはるかに危険度が高い。企業が従業員の安全を心から願うのであれば、工場の安全は欠かせない。日本の多くの工場では安全に関わる法律を守ることに懸命になっているだろう。勿論、法律を守ることは当然であるが、法律を守っただけでは安全ではないことに気付く必要がある。世の中には実に多様な化学物質が存在し、それらの製造プロセスは多種多様である。法律が全ての物質を網羅して安全を保証することは不可能である。では、どうすればよいのだろうか。この考え方が一歩進んでいるのは米国だ。化学プロセスを作業方法や管理方法も含めて安全に構築するのは企業の義務であり、安全のための社内のルールを守ることを法律が要求している。つまり、安全のための社内ルールを破ることは、法律に反することになる。

この考え方が最善であるかどうかは分からないが、法律を作成する側の人たちにとって未知の物質の取扱い方法を規定することは容易ではない。否、ほぼ不可能ではないだろうか。

米国の法律が「少なくともこれは守らなければならないこと」と解釈されている一方、日本では「法律を守る」ことで満足していて、それでも事故が発生したら「法律が悪い」とか「運が悪かった」などの言葉が聞かれるのは残念である。まず、全てを法律で決めて安全にすることは不可能であることを認識したい。私が工場の安全を願うのは、それがそこで働く人たちの、更には周辺に住む人たちの幸福の必要条件だからである。

### テロの恐怖

2001年9月11日に米国で発生したテロ以降、我々はテロについても気を付けなければならない状況に置かれている。アルカイダの首謀者とされるビンラディンが殺された後も、中東の安定は得られず、最近ではISと呼ばれるグループによるテロが頻発している。2015年11月13日に発生したフランス、パリでの同時多発テロは記憶に新しい。テロを封じ込めようとして欧米各国がISの空爆を強化しても解決の望みは薄いだろう。テロが「自分たちを不幸にした先進国が憎い」という感情に基づいたものと考えれば、暴力でテロをなくすことは不可能だ。しかし、突然「私たちはあなたたちと仲良くなりたい」と申し出ても受け入れられないだろう。つまり、テロの恐怖は当分の間、続くものと覚悟が必要だということだ。テロの温床は「自分は不幸だ」と感じている人が存在することにある。企業が金のために従業員の安全を疎かにするということは、従業員を不幸に陥れ、それがその従業員をテロに走らせる原因にならないとも限らないのである。もし、そのようなことが起こ

れば企業にとって大きな痛手である。中国で起きた日本へ出荷する食品に農薬を混入させた事件なども、従業員の不満が引き金となっていたことを思えば、身近に迫った問題だとも言えるだろう。

この問題はプラントを設計するという立場からは極めて重要な問題である。テロをどのように防ぐのかを考える場合、外部からの侵入防止策強化、外部からの攻撃阻止、内部犯行の防止など、従来は考えもしなかったことも格段に増えることは間違いない。つまり、企業としては、より多くのリソースをテロ被害の防止に割く必要が生じていると言える。こうしてみると、それらのコストは何らかの形で製品価格に反映され、一般消費者も高い製品を買わざるを得ないことになる。これでは、テロリストたちの思うつぼだ。

### **お金と幸福**

「お金は人を不幸にも、幸せにもする力がある。」とはNHKの朝ドラ「あさが来た」の中のセリフであるが、まさにその通りだと思う。ギャンブルにつき込んで失ったお金は戻ってこない。それを取り返そうと更につき込めば、更に損をして惨めな思いをする。しかし、未来を切り開く志を持った人にお金を渡せば、より良い社会の構築に役立ち、人々を幸せにすることもできる。朝ドラのセリフの趣旨はそのようなものだろう。それはそれで正しいと思うが、私が気になっているのは、格差や貧困を作り出しているのは、お金の扱い方にあるのではないかということだ。現在の社会は資本主義の根幹である「努力した者が報われる」という社会になっていると言えるだろうか。子供の貧困やワーキング・プアの問題は、人の幸福を無視してお金だけを追い続けてきた我々の社会の仕組みのあり方にあるのではないだろうか。今、私たち人類はお金をどのように扱うべきかを真剣に考えるべき時に来ている気がする。